法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

都市近郊における里山の保全と活用について：多摩丘陵里山エコミュージアムの視点から

BABA, Kenichi / 馬場, 憲一

(出版者 / Publisher)
法政大学多摩論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集
(巻 / Volume)
30
(開始ページ / Start Page)
123
(終了ページ / End Page)
145
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009621

都市近郊における里山の保全と活用について

―多摩丘陵里山エコミュージアムの視点から―

馬　場　憲　一

はじめに

1960年代の高度経済成長期に、東京などの大都市近郊にある丘陵は大規模な宅地開発が進行し、都市周縁の丘陵部に立地する農村地帯の自然・歴史・伝統文化などは急速に失われていった。21世紀を迎えた今日、都市近郊の丘陵部においては、都市化した旧農村地帯に残る自然・歴史・伝統文化を維持・継承しながら持続可能な社会を創造していくことが地域にとって大きな課題となっている。そこで古くから人々の生活と深い関わりを持っていた都市近郊の「里山」に着目し、「エコミュージアム」というシステムを展開させることによって、里山の保全と活用を持続可能なものとしそこに暮らす人々の生活を豊かなものにしていくという研究視点に立って、都市近郊における里山の保全と活用のあり方を考察することにした(1)。

そのため本稿では、はじめにテーマとした「里山」についてその現状を述べ、次に東京近郊に位置する多摩丘陵を事例に里山の歴史的変遷を明らかにし、最後に多摩丘陵の一角を占める東京都日野市百草地区を取り上げ「エコミュージアム」というシステムをその地域で展開させることによって、里山としての保全と活用を図るという構想を提案し検討した(2)。

1．里山について

里山とは、人里の近くにあって人々の生活と結びついた山のことである。人々は、古くから集落に近い山に入り、家庭用燃料の薪・木炭、堆肥を作るための落ち葉、食料としての山菜、キノコ、果実などを得ており、日々の暮らしの中で極めて重

写真１　東京都指定有形民俗文化財「小泉家屋敷」（1976 年８月撮影）

要な場所となっていた。このような山を里山と称してきた(3)。

1950 年代半ば頃から里山を供給源としていた家庭用燃料の薪・木炭が姿を消し、また化学肥料の普及などによって里山の経済的価値が失われてくると、1960 年代には大規模宅地開発が始まりその開発よって都市近郊の里山は急激にその姿を変貌させていった。写真１は多摩丘陵の一角を占める東京都八王子市鑓水にある東京都指定有形民俗文化財「小泉家屋敷」を 1976 年８月に筆者が撮影したもので、1970 年代の里山の風景がどのようなものであったのかを理解することができるが、撮影時、すでに周辺は多摩ニュータウン開発が進行していた。

そのような都市近郊での大規模開発が開始されてから約半世紀。この間、全国各地の里山は利用価値の減少と、その里山を維持管理してきた人々の高齢化や後継者難などによって放置され、植生の変化がもたらされ里山は急激に荒れ人々の古くからの暮らしとともに形成されてきた日本的景観を代表する里山の風景は急速に失われていった。

このような状況の中で、国は 2005 年に文化財保護法を改正し、その里山の風景などを「文化的景観」と位置づけ「地域における人々の生活又は生業及び地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことができないもの」（第２条）とし、文化財の対象として保護を図るようになってきた(4)。

2. 多摩丘陵の歴史と開発

東京近郊に位置する多摩丘陵は全国的にみても有数の丘陵で、面積は約 300 平方キロメートルあり、西は高尾山東麓から東は東京湾岸付近まで広がっていた。高度は八王子市の南部で約 220m ありもっとも高く、東南に向かうにしたがって段々に低くなり、東端は約 20 ～ 30m の高さで東京湾に臨んでいた。

この多摩丘陵には縄文時代･弥生時代の住居址の遺跡(写真 2)が発見されており、古くから人々が住み生活を営んできていたことがわかる。奈良時代に至ると武蔵国分寺造営などに伴ない屋根瓦（写真 3）や須恵器を生産するために多摩丘陵一帯は一大窯業地帯となっていた。平安時代には多摩丘陵に谷戸田（写真 4）を開発し、ここを拠点に横山党という武士団が形成されてきていた[5]。

写真 2　多摩ニュータウン NO.57 遺跡（東京都指定史跡）

写真 3　武蔵国分寺の古瓦

写真４　多摩丘陵の谷戸田（現・八王子市片倉町付近　1978 年撮影）

江戸時代に入ると農民たちは谷戸田以外の丘陵部を耕地化して農業生産力を向上させていた（写真 5，6）。特に 19 世紀半ば頃に至ると絵図類に多摩丘陵の様子が描かれ、当時の集落状況と里山との関係を知ることができ、写真 7 のように村落を描いた村絵図からはその里山の利用状況などがわかる[(6)]。

集落と里山との関係は明治時代以降も 100 年余りは変わることはなかった。その状況は太平洋戦争後の 1947 年に米軍が多摩丘陵を撮影した航空写真（写真 8）に、まだ多摩丘陵に開発の手が伸びず里山として機能し利用されていた様子が写され

写真５　耕地化する丘陵部（現・八王子市南大沢付近　1969 年撮影）

写真６　幕末の多摩丘陵（現・八王子市鑓水）

写真７　多摩郡三沢村絵図（土方邦人家 所蔵）

ており、その状況を確認することができる。

東京近郊に位置する多摩丘陵が特に大きく変貌を遂げたのは、日本が高度経済成長期を迎えた 1960 年代半ばの大型住宅団地の開発以降のことであり、多摩市をはじめ四つの自治体にまたがる約 3060 ヘクタールの土地を買収し人口 40 万人の多摩ニュータウンの建設が始まった時期が一つの大きな転換点となっていた(7)。

写真８　開発前の多摩丘陵（日野市高幡付近の航空写真　1947 年撮影）

写真９　変貌を遂げる多摩丘陵（日野市「高幡不動尊」裏手の丘陵部。2007 年撮影）

現在、変貌を遂げてきた多摩丘陵の様子は掲載した写真 9、10 の中に見ることができ、かつての循環型システムで里山を維持していくことは困難な状況になってきていることがわかる。

写真 10　多摩丘陵（町田市相原町より東の方角を望む　2007 年撮影）

3. 里山の保全・活用のための百草里山エコミュージアム構想

(1) エコミュージアムについて

「エコミュージアム」の語源は生態学（Ecology）と博物館（Museum）からの造語で、人間と環境との関わりを扱う博物館として、1960 年代にフランスで誕生した考えである。

エコミュージアムは「人びとが生活する地域全体を博物館と見なし、そこでの自然・歴史・文化・産業・生活など環境そのものを調査・研究対象とし、地域遺産を現地において保存・展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館」と定義されている。そして、その運営は住民参加による運営を原則とし、図 1 のような概念図のように普通の博物館と違って対象とする地域内にコアと呼ぶ中核施設（情報・調査研究のセンター）と、自然・歴史・文化・産業・生活などの遺産（資源）を展示するサテライト、新たな発見を見い出す小径（＝ディスカバリートレイル）などを配置し、来訪者が地域社会の環境などをより積極的に理解するシステムで行われている。

エコミュージアムの運営は個人・自治体・会社などが参加したアソシエーションが行うのが、一般的な運営形態である。図 2 のようにアソシエーションは、学

図１　エコミュージアムの概念図（日本での実施を想定）

識経験者・研究者などによって構成される学術委員会、エコミュージアムにボランティアで参加している人や利用者で構成される利用者委員会、公的機関関係者・サテライト所有者などによって構成される管理者委員会を設けていた。そして、その委員会の代表者をメンバーとする運営会議が運営の方針を決め、その運営方針にもとづきエコミュージアムは運営されていたが、実際の運営は、館長･学芸員･事務職員などの常勤職員が配置されて行なわれていた(8)。

以上のような定義と考え方によって、組織的に運営されているのが、エコミュージアムであり、次に里山を対象とする「里山エコミュージアム」の可能性を検証していくことにする。

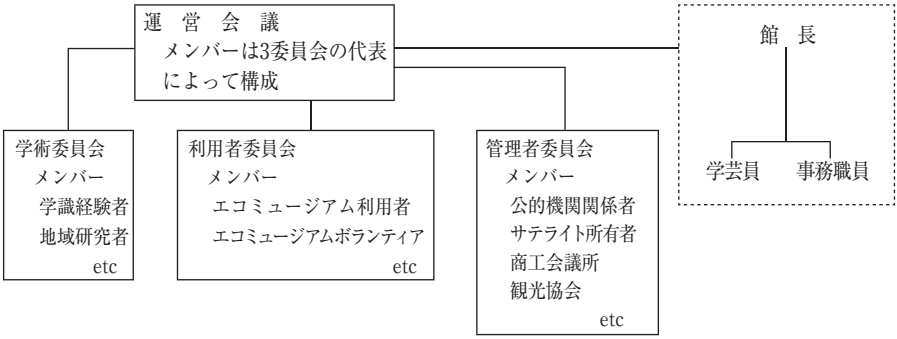


図２　エコミュージアムの運営組織

(2) 百草地区の地域遺産（資源）・活動団体・展示等施設

「里山エコミュージアム」の可能性の検証にあたって、まず、対象とする日野市百草地区の概要についてみていくことにする。

東京都日野市は都市近郊に位置し、水と緑に恵まれた素晴らしい町である。百草地区はその日野市域の中でも東南部に位置し、多摩丘陵の一角を占める地域である。この百草地区の東西約 1.5km、南北約 2.0km、面積約 3.0 平方 km の範囲は、かつての百草村の人々との関係を持つ里山とその村人が暮らす集落から成る。

ここでは上記（1）のエコミュージアムの考え方に沿って、百草地区の里山保全・活用を視野に入れた活動を展開するために、エコミュージアムのテリトリー（範囲）、地域遺産（資源）・活動団体・調査研究展示施設などの現状をみていくことにする。

まず、エコミュージアムの想定されるテリトリーは、図 3 に示したように東西 1.5km、南北 2.0km、面積 3.0 平方 km の範囲である。

百草地区の様子を昔にさかのぼってみていくと、里山との関わりは 2 枚の絵図によって理解することができる。絵図（写真 11）は、今から約 150 年前の百草村を俯瞰した絵であり、百草村と里山の様子が非常によく描かれている。もう一つの絵図（写真 12）は、やはり約 150 年前に描かれた百草村の村絵図で、山麓の集落と里山の利用状況がよくわかり、里山の保全・活用をコンセプトとするエコミュージアムのテリトリーを考えていくと過去の歴史地理的状況を踏まえた適地と考えられる。

図３　百草里山エコミュージアムのテリトリー想定図

写真 11　幕末の百草村 (『調布玉川惣畫圖』より)

写真 12　百草村絵図 (石坂一雄家 所蔵。『村絵図を楽しむ 3 －百草―』より)

つぎに旧百草村とその周辺の地域遺産についてみていくことにする(9)。

まず自然遺産であるが、この百草地区には現在、スダジイの群生地、ヤマフジ、ヤマツツジ、イヌザクラ、ヤマザクラ、コナラ、クヌギ、オカタツナミ、ヒメハギ、ヒヨドリバナ、ヤマユリ、コゲラ、タマムシ、ツマキチョウ、ヤマガラ、ホタル、エナガ、シジュウカラなどの動植物も生息しており、豊かな自然遺産（資源）に恵まれ、かつての里山の姿を垣間見ることができる（写真 13 ～ 16)。

さらに地域に暮らしてきた人々の歴史と文化を伝え歴史・文化遺産（資源）としては幻の真慈悲寺、京王百草園、百草八幡神社、百草観音堂、蓮松禅寺之碑、蓮松住職の墓、六地蔵、庚申塔、旧蓮松寺の山門、旧稲城往還、真照寺、大宮神社（写真 17 ～ 20）などの歴史・文化遺産（資源）が点在しており、地域に暮らしてきた人々の歴史と文化を伝えている。

写真 13(※) ヤマフジ

写真 14(※)　イロハカエデ

写真 15(※)　オカタツナミ

写真 16(※)　ヤマガラ

写真 17　百草八幡神社境内

写真 18　六地蔵

写真 19(※)　百草八幡神社

写真 20　庚申塔

また､この地区での地産地消的な生産活動を通して乳牛飼育（牛乳､アイスクリーム)、ブルーベリー栽培、リンゴ栽培、養鶏業（たまご）(写真 21 ～ 24）などが行なわれており、この地区で生産される産業遺産（資源）も豊富である。

つぎに住民の活動団体をみていくと、この地区の自然を守るために地域住民によって結成された「倉沢里山を愛する会」、ホタルの生息環境の復元活動をしている「真堂が谷戸蛍の会」、ブルーベリー・リンゴ・野菜・米などを栽培しながら農業体験講座を開催している石坂ファームハウス、幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクト（写真 25 ～ 28）に参加する各種団体など歴史・文化・自然・産業・生活に関わって活動している団体が多数存在している。

写真 21　乳牛飼育場

写真 22　牛乳加工店

写真 23(※)　ブルーベリー農園

写真 24(※)　玉子

写真 25　真慈悲寺調査プロジェクト

写真 26　倉沢里山を愛する会

写真 27　真堂が谷戸蛍の会

写真 28　モグサファーム

また調査・研究・展示等の施設として、真慈悲寺調査センター（写真 29 ～ 31）・百草図書館などもある。

写真 29　真慈悲寺調査センター

写真 30　真慈悲寺調査センター（展示コーナー）

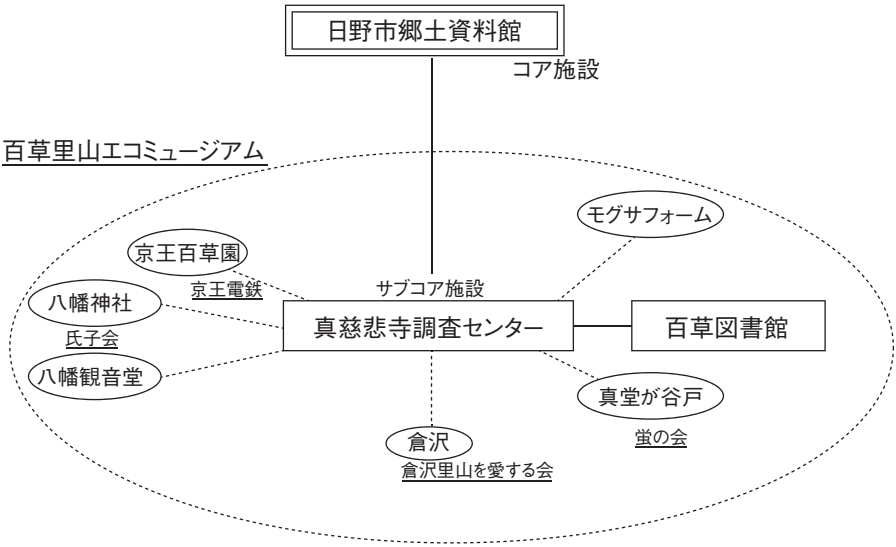
写真 31　真慈悲寺調査センター（展示コーナー）

(3) 百草里山エコミュージアム構想

上記（2）で述べたように百草地区は「里山」という視点からのテリトリーとしては恰好の場所であり、また百草地区にはエコミュージアムを構成するための自然・歴史・文化・産業・生活などに関わる遺産（資源）が多数存在し、それらをマネジメントしている人々や団体、さらにそれら遺産（資源）を調査・研究・展示等をする施設なども存在しており、これらの条件を加味して、以下のような百草里山エコミュージアム構想をイメージし提案することができる。

まず日野市百草地区は里山との関連で自然や歴史・文化を共有し一定のまとまりをもった地域を形成してきており、一体化したテリトリーとして捉えていく必然性はある。

そのため情報・調査研究センター機能を担うコア施設は、テリトリー外であるが日野市内の自然・歴史・民俗に関する調査研究・展示・講座・体験学習などを行っている日野市郷土資料館（日野市程久保 550）をあて、テリトリー内には鎌倉時代に存在していたと伝えられる真慈悲寺の調査研究のために設けられ展示等も行っている真慈悲寺調査センターをサブコア施設と位置づけ、エコミュージアム内の中核施設とする。



そして、テリトリー内の地域遺産をみていくと豊富な地域遺産（自然遺産をはじめ歴史・文化遺産）が点在し、展示・公開が望まれているので、それらのうち代表的な遺産（資源）についてはエコミュージアムのサテライトとし、またはテリトリー内にはそれらを結ぶディスカバリートレイル（発見の小径）を設定する。またテリトリー内には自然や歴史・文化・産業などを対象に様々な実践活動を通して地域貢献をめざすグループの存在を認めることができるので、それらの団体とエコミュージアムとの協力関係をつくり、それら団体とのネットワーク化を通して運営を図っていくことが可能である 。

このような構想が百草里山エコミュージアム構想である。

おわりに

以上、本稿では 21 世紀を迎えた今日、都市近郊の丘陵部に立地する旧農村地帯の自然・歴史・伝統文化を維持しながら持続可能な地域社会を創造するという視点から里山の保全と活用のあり方を考察した。事例として東京近郊に位置する多摩丘陵を取り上げ、その歴史的変遷を明らかにし、その丘陵の一角を占める東京都日野市百草地区一帯を「エコミュージアム」という考え方に立って里山として保全・活用するという試みを検討した。

その結果、都市近郊に位置する多摩丘陵の里山は 1960 年代の高度経済成長期を経て、すでに従来からの循環型システムでの維持は困難となってきていることが明らかになった。そのため今後は日野市百草地区で取り組まれているような市民による個々の活動と地域遺産（資源）を新たにエコミージアムというシステムの中に組み込みネットワーク化して展開させていくことによって、変貌した里山の姿を維持しながら保全と活用を図っていくことが可能な状況にあることを指摘し本稿のまとめとする。

【注】

(1) このような視点からの研究は管見のかぎり、これまで行われていない。

(2) 本稿は 2011 年 8 月 4 日、国連大学高等研究所の持続可能な開発のための教

育プログラム「第 2 回 ProSPER.Net 若手研究者スクール（Young Researchers' School）」（法政大学多摩キャンパス　百周年記念館）で行った講義をベースにまとめたものである。当日の講義では受講生に視覚的にも理解してもらうように写真や図版を多用して説明をした。そのため本稿においてもそれらの写真・図版を掲載し、論文の内容を多角的に理解してもらうことに努めた。また講義は環境問題に関心のある海外の学生に向けて行なったものであり、本稿のさらなる内容理解のため当日配布した英文の講義概要を文末に参考資料として掲載した。

(3) 養父志乃夫著『里地里山文化論』上・下（農山漁村文化協会　2009 年）、丸山徳次ほか編『里山学のまなざし―「森のある大学」から』（昭和堂　2009 年）。

(4) 文化財保護法研究会編著『最新改正 文化財保護法』（ぎょうせい　2006 年）。2013 年 11 月 1 日現在、全国で 38 件の重要文化的景観が選定されている。

(5) 多摩丘陵の古代・中世の歴史と開発については、段木一行著『中世村落構造の研究』（吉川弘文館　1986 年）を参照。

(6) 多摩丘陵の近世の歴史と開発については、拙著『近世都市周辺の村落と民衆』（雄山閣　1995 年）を参照。

(7) 多摩ニュータウンの開発については『多摩市史　通史編二　近現代』（多摩市　1999 年）　821 ～ 886 頁を参照。

(8) エコミュージアムの定義や内容については、拙著『地域文化政策の新視点－文化遺産保護から伝統文化の継承へ－』（雄山閣出版　1998 年）を参照。

(9) 旧百草村とその周辺の地域遺産については『七生丘陵 百草倉沢散策マップ』（幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクト 編集・発行）を参照した。なお、本文の以下の説明に関わって掲載した写真の一部は同マップから転載（※ 印を付記）させていただいた。

【参考資料：「第２回 ProSPER.Net 若手研究者スクール（Young Researchers' School）」で配布した講義概要】

Conservation and Utilization of Suburban Satoyama - From the Perspective of Tama Hills Satoyama Eco- Museum

Kenichi Baba, Professor, Hosei University

Introduction

The lecture will be about conservation and utilization of suburban Satoyama, taking Tama Hills in Tokyo and its historical changes as an example. The focus will be on the recent movement in Mogusa District in Hino, Tokyo, which attempts to establish a system called "Eco- museum" in an effort to conserve and utilize Satoyama.

4. Satoyama

Satoyama refers to a mountain closely related to livelihood of human beings that live nearby.

During the mid 1950s, the demand for firewood and charcoal which came from Satoyama disappeared. The spread of chemical fertilizers also promoted the decline of Satoyama's economic value. During the 1960s, large-scale housing land development started, which transformed suburban Satoyama drastically.

It has been half a century since the beginning of such large-scale development. Since then, Satoyama all over Japan have witnessed decline of utility value. People who have being taken care of Satoyama are now advanced in age and many are without successors. Left alone, Satoyama's vegetation has changed, causing its rapid decline. The Satoyama landscape, the most Japanese landscape, which has been formed with human livelihood, has been disappearing.

In 2005, Japanese Government revised Cultural Properties Protection Law, and the Satoyama landscape was designated as "cultural landscape". The Article 2 defines it as "Beautiful landscape formed by local human living, vocation, or climate. It is

indispensable for understanding our people's life or livelihood," and it is now protected as a cultural asset.

5. History and development of Tama Hills

Tama Hills in suburban Tokyo is one of the most prominent colline zones in Japan with an area of about 300km^2, ranging from Mt. Takao in the west to Tokyo Bay in the east. The elevation is highest in south Hachioji, about 220m, lowering toward southeast until it is 20-30m near Tokyo Bay.

Remains of human dwellings from the Jomon and Yayoi periods have been found in this area, indicating a long history of human life. During the Nara period, this entire area was a large ceramic manufacturing center, producing roof tiles for Musashi Kokubunji Temple and Sueki unglazed ware. During the Heian period, Yato was developed, which became a home of Yokoyama-to, a samurai clan. During the Edo period, farmers cultivated the hillsides for more production. Tama Hills appears in many artworks from the mid 19the century, which tells us the relationship between villages and Satoyama.

Even after the Meiji period, the relationship between the villages and Satoyama remained unchanged for more than 100 years. This is evident in an aerial photo taken by the US Air Force in 1947, which shows Tama Hills, still undeveloped, was functioning as Satoyama.

It was the development of large apartment complex in the mid 1960s, when Japan was in the middle of the rapid economic growth, that started a great transformation of Tama Hills. About 3060 hectares that stretches across four municipalities including Tama was purchased for the construction of Tama New Town which was to house 400,000 people. This marked a great turning point.

6. Mogusa Satoyama Eco Museum concept for the conservation and utilization of Satoyama

(1) Eco- museum

The term "eco museum" was coined combining ecology and museum. The idea originated in the 1960s France.

The concept of eco museum is to regard the whole region in which people live as a museum. Its environment—nature, history, culture, industry, and life—is researched and studied. By preserving and displaying the local heritage, the museum contributes to the development of the community. Unlike ordinary museums, residents' participation is essential. There are "core" facilities (information and research center), "satellites" which displays natural, historical, cultural, industrial, and living heritages (resources), and "discovery trails" where people can find new things will be established, so that the visitors can have a better understanding of the community.

(2) Mogusa's local heritages (resources), activity groups, and display facilities

Hino is in suburban Tokyo, blessed with abundant water and green. The Mogusa district lies in its southeastern part, covering a part of Tama Hills. An area of about 3.0km^2 in Mogusa, 1.5km from east to west and 2.0km from north to south, consists of Satoyama and a community once called Mogusa Village.

We will examine the local heritages (resources), activity groups, and research/study display facilities in accordance with the above eco museum concept in (1), for further development of Mogusa's Satoyama conservation and utilization efforts.

Mogusa has a variety of flora and fauna such as Clustering ground of "Sudajii", mountain wisteria, mountain azalea, "Inuzakura", mountain cherry, quercus serrata, sawtooth oak, "Irohakaede", "okatatsunami", polygala, joe-pye weed,,mountain lily, Japanese pygmy woodpecker,jewel beetle, Tsumakichou", varied tit, firefly, long-tailed tit, and great tit. Blessed with rich natural heritages (resources), it is reminiscent of Satoyama in old days. There are also many places of historical/cultural heritages (resources) such as "phantom" Shinjihi Temple, Keio Mogusa-en, Mogusa Hachiman Shrine, Mogusa Kannon-do, Rensho Zen Temple Monument, Priest Rensho's grave, Six Jizo, Koshin Pagoda, Old Rensho Temple Gate, Old Inagi road, Shinsho Temple, and Omiya Shrine, reminding us of the people's history and culture. There is also a "local production for local consumption" movement, enriching the industrial heritages (resources). Cows for milk and ice cream, blueberries, apples, and poultry (eggs) are raised here.

The residents have formed various groups in many fields including history, culture, nature, industry, and human living: "Kurasawa Satoyama Lovers" for nature conservation;

"Shindogayato Firefly Group" for restoring the environment for fireflies; Ishizaka Farmhouse that hosts farming workshops while growing blueberries, apples, vegetables, and rice; and groups for "phantom" Shinjihi Temple Research Project.

For research, study, and display, there are Shinjihi Temple Research Center and Mogusa Library.

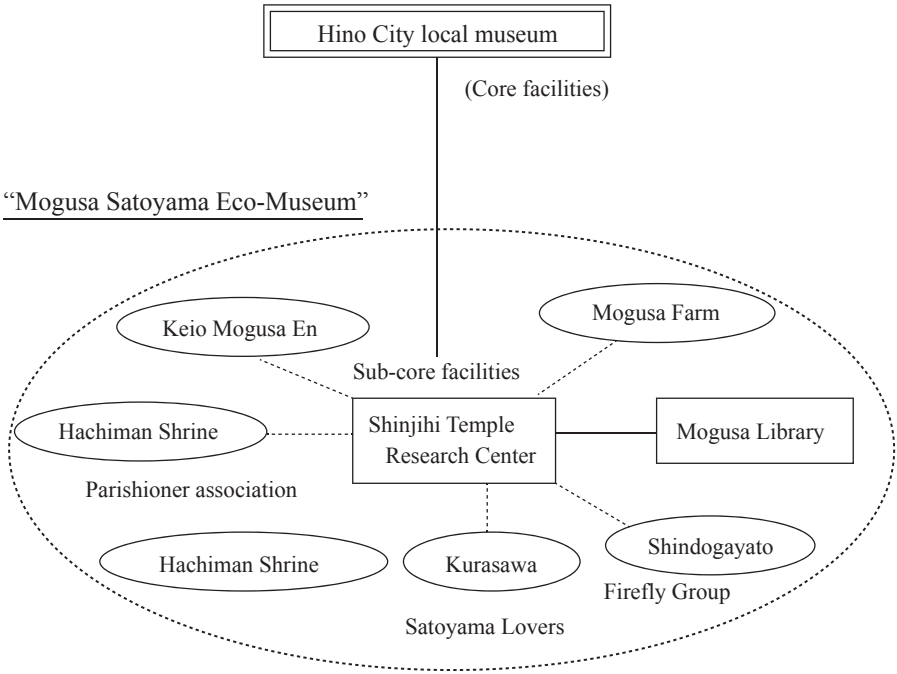
(3) Mogusa Satoyama Eco -Museum concept

As described in (2), Mogusa has a lot of heritages (resources), natural, historical, cultural, industrial, and human living, which are necessary for establishing an eco museum. There are also people and groups that manage them, as well as facilities for research, study, and display. Considering these facts, the following concept for Mogusa Satoyama Eco- Museum was formed.

In Closing

We have looked at the historical changes of Tama Hills, with a particular focus on the recent movement in Mogusa, Hino, that attempts to conserve and utilize Tama Hills as Satoyama through the eco- museum system.

Since the rapid economic growth in the 1960s, it has become increasingly difficult for suburban Satoyama to maintain the old circulatory system. From now on, individual movements at a local level should be integrated into the new eco museum system. This will make it possible to restore, conserve, and utilize Satoyama.


Hino City local museum
(Core facilities)
“Mogusa Satoyama Eco-Museum”
Keio Mogusa En
Mogusa Farm
Sub-core facilities
Hachiman Shrine
Shinjihi Temple
Research Center
Mogusa Library
Parishioner association
Hachiman Shrine
Kurasawa
Shindogayato
Firefly Group
Satoyama Lovers